

ラブホで迎える朝は倦怠感が漂っている。瞼を上げた視界は軸が歪み、インテリアの輪郭がブレていた。習慣的に枕元を手探りし、眼鏡を忘れたドジに舌打ち。

まだ寝足りない。体が睡眠を欲している。そりやそうだ、昨日は年も考えず無茶をした。

辛い薬は抜けてるようで、関節が軋む以外は健康そのもの。二度寝しようと欠伸を漏らし、目の前の顔に息を呑む。

すぐ隣に薫が寝ていた。全裸で。

「心臓に悪い」

戯れに手を伸ばし、髪の毛に指を通す。サラサラして気持ちがいい。一房掬って落とし、また摘まんで擦り、感触を楽しむ。

「ったく」

すっかり毒気を抜かれてしまった。当初は浮気の埋め合わせにデートに連れ出し、適当に遊ばせて機嫌を取り、うやむやにする計画だった。

観覧車に誘ったのはただの思い付き。薫が以前言っていたことを思い出し、久しぶりに乗ってみたくなったのだ。

『風船はいらない。ポップコーンもいらない。たった一晚、ぐっすり眠る夢を叶えてほしかった』

それを聞き、願いを叶えてやりたいと思った。

ゴンドラに押し込んで父親から逃がし、たっぷり眠らせてやりたいと。

今、その願いが叶った。

薫は遊輔のそばで熟睡してる。この顔が見ただけで報われた、接待デートが無駄じゃないと思えた。

パンダ四十八手マグはただけねえけど。

心の中でこつそり付け加え、推理の裏を取るべくワードローブの荷物を点検。

「めっけ」

年季の入った手帳をばらばらめくり、青インクでUと記されたページを精読。スクリユードライバー、ゴールデン・スリッパ、ソルティ・ドッグ、ボヘミアン・ドリーム、ラスト・ワード……。

「やっぱそうだ、俺の好きなのばっかじゃん」

Uの字レシピにはびつしり字が書きこまれていた。原料の配分や作り方は当然として、ソーダを増量するとかライムを搾るとかミントを添えるとか、遊輔好みの味変が事細かにメモってある。

「……お前さあ」

なんだかむずむずし、荒っぽく手帳を閉じる。盗み見の罪悪感は無。文句あんならハメ撮り消せ。

手帳を荷物に戻したのち、サイドテーブルに置かれた光り物に目を留める。

薫が手ずから外したピアスとイヤークラフ。

ピアスの数は自己嫌悪の数と言ったのは誰だったか。

薫のピアスは一種の自傷行為、虚しさをごまかす代償行為。要は遊輔の煙草と同じ、痛め付けるのが耳か肺かの違いだけ。

やんちゃしていた時代を振り返り、ピアスの穴が半日足らずで塞がった、新陳代謝の良さを懐かしむ。何食わぬ顔でピアスを摘まみ、唇に持つていく。ひんやりした金属に口付け、それを薰の耳にあてがいがい、テールに戻す。

さて、コイツの起床前に事を済まさねば。ベッドを離れてトイレに行き、体内の残滓を掻きだす。後始末に手を借りるのは癪だ、惨めすぎる。抱かれる側に回る屈辱は渋々受け入れたものの、最低限格好付けたい。そういやフェラしてやんなかつた。俺だけしてもらつた。別にやれとも言われなかつたが、同じ男だからこそ、物足りない気持ちがあつてしまつて後ろめたい。

トイレットペーパーを巻き取つて後始末を済ませ、ベッドにもぐりこむ。すぐさま眠気が押し寄せた。

薰が起きたのは二時間後。遊輔は今起きたふりをする。(続)